

「自立」に向けた学びの追求
— ゼミ活動を通しての「学び」の構築 —

小林 信次

日本福祉大学 子ども発達学部

Search after Learning for 'Autonomy'
— Construction of 'Learning' through Seminar —

Sinji KOBAYASHI

Faculty of Child Development, Nihon Fukushi University

はじめに

— 専門演習 (ゼミ) の「学び」をどう構想しているのか —

私の問題意識は、大学での「学び」である。学びの場は多面的であるが、私が課題としているのは、日本福祉大学の専門演習での「学び方」である。どういうゼミ活動をしていけば、「自立」に向けた学びになっていくのかということである。従って、私のここでの「自立」とは学びにおける自立ということが主要なテーマになっている。

大学生は、専門的な「学び」を身につけて一人前になっていくということが期待されている。大学では、科学研究の成果を講義などを通して学ぶことが中心になっている。研究の仕方としては「問題発見」「問題の根元的な解明・本質の理解」「問題の解決方法」である。ゼミでの学習は、これらの学び方を身につけて、自分の「テーマ」を絞り込み、広く、より深く研究していく場でもある。

日本福祉大学は、1年・2年が「総合演習」として位置づけられ、3年・4年の専門演習へと引き継がれいく。

総合演習には、大きくとらえると、次のような課題がある。

- ・学問することの面白さを知り、幅広い教養を身につける。
- ・自ら学習を進めていく習慣、姿勢を身につける。
- ・自ら学習を進めていくスキルを習得する。

私は、専門演習の少人数のゼミ活動に焦点を当て、青年としてどう自立へ導いていけるか、その有効性と可能性を考えている。どんなゼミ活動をやっていくと自立へ繋がる「学び」ができるのか、私のゼミの実践・事例を追求したいと考えている。

ゼミ (ゼミナール) は、演習科目として、一人の担当教師に、少人数で、一定のテーマを追求していける授業であるし、少ない人数で自主的に学生が研究していける場になっている。

私が、ゼミ活動での自立的な学習として構想しているのは、学び合いのための様々な工夫である。それは、「共感的な学び」であり、「批判的な学び」をしていくことである。こうした学びを通して自分の問題、課題を体験的にくぐりぬけ、他の仲間との矛盾葛藤を通してより

青年・学生の成長過程があるのではないだろうか。ゼミの授業を、一人一人が「自分を見つめ直しをしていく場」にしていきたいと考えている。

日本福祉大学の「ゼミ活動の実態調査」を見ると様々な問題、課題が提示されている。例えば、『2008年度ゼミ教育に関する調査報告書』（福祉経営学部）「ゼミは講義と違い学生達の主体的な活動を軸に構成されているが、それ自体が困難になっている。課題を発見すること、そのために自分で調べること訪ね歩くことなど学生たちは、忙しいからと忌避する傾向が強くなった。キャリア開発の進展とゼミ活動が連携していない。ここに落とし穴が空いているように思える。」⁽¹⁾

ここでは、ゼミの運営がより難しくなっていてキャリア教育の課題も示されている。

また、学生と教師が共に進める「学び場」の例として、子ども発達主催の「FD フォーラム」がある。その内容の紹介がしてある。『子ども発達学論集』第2号『子ども発達学部FDフォーラム』⁽²⁾「あなたにとって大学とは？本音でトーク」の「具体的要望、自分探し自己確立、勉強」の学生の生の声に注目したい。特に、自己確立の「主体性の確立、様々な体験、視野の拡大、個性の発見、自己変革、成長」という項目は、ゼミでの「共同的な学習」にも関連していると考えられる。

私は、ゼミの学生の実態や傾向をつかみながら、何かもっともふさわしい活動になるのかを問いながら、計画を相談しながら実践していきたいと考えている。ゼミの大きなテーマとしては、「自立することはどういうことか」「自立するための学びとは何か」を問いながら、自立した学生をどう育てていくのか、どう育つのかということが課題である。

ゼミの学生には、すでに前年度に、子ども発達学部の専門演習のための「ゼミナールの概要・シラバス」として小林ゼミの方針を示している⁽³⁾。

また、学生からの希望調査をとり、それに基づいて15名のゼミのメンバーも決定している⁽⁴⁾。

私は、専門演習のテーマとして「教師の実践と授業・文学と教育」として研究課題を示し、そのため取り上げていく分野的なものとして、4つの学び方を提示している。

- ・実践記録の読みや分析を通しての学び
- ・教師としての実践力をつける実演的な学び
- ・文学・詩を通しての学び

・現場との交流を通しての学び

2年間の演習を、大きな視点でとらえ、3年次で土台を築きながら4年次へ引き継いでいくことを考えていた。それは、3年次では、主に「教師論・教育実践力」と「授業論」をやり、余裕があれば、「文学・詩」を軸にゼミ活動を推進していくことを考えた。

ゼミ活動の成果は、4年次の卒業時に問われるだろうが、研究の時間的制約もあり、まずは、専門演習の導入の活動について焦点化して追求してみたいと考えた。従って、ここでの研究報告は、3年次の前期の活動の紹介になっている。

ゼミの学生の実態と活動計画

(1) 「ゼミ」への参加——学生の実態・問題意識——

私は、ゼミの最初に「実態調査」として、「私の二年生までの大学生活」という題で学生に報告してもらって、どういう生活をしているのか、その様子を基にゼミへの参加姿勢を掴んでいる。

学生の実態として「層」として掴むことにしたのは、『2009年度 学生像に関する調査報告書』を参考にしてみたからである⁽⁵⁾。

この『学生像に関する調査報告書』によれば、「A層」は前向きタイプで、性格は明朗活発で、講義だけでなく、サークル・ゼミ活動、アルバイトに積極的に取り組んでいる。交友関係も広く、周りの信頼を得ている。ゼミの女子に多くみられるタイプである。「B層」は、素直な性格を持っている反面、それが『あだ』となって周りの雰囲気にならされてしまう。明確な目的は持っていないが、資格を取得することへの意識が強い。自立性に欠けている。「C層」は、「生活リズムが不規則であり、自らの力で現状を打開することが困難」と指摘してある。

この実態調査を基に、とりあえず、「大学生活」の調査の記録を基に「C層」「B層」「A層」と仮に分類してみた。しかし、私のこの分類は、客観的な資料を基にしていない。あくまで4月当初の学生の様子などから推し量ったものである。

現状は楽しく遊ぶ(C層)

「大学に来て、一人暮らしを始めて、自由な時間が増えてバイトやサークルが無い日は、ボーリングに行ったりと、毎日ひたすら遊んでいる。働いたらそんなことをしている暇がなくなるので今のうちにたくさん遊んでた

くさんの所に行きたい。しかし、遊んでばかりでは、働くことができないのでいつか必死に勉強しなくてはいけないと思う」

- ・今のうちに遊んでおきたい。遊び、バイトに流れている。
- ・いつか必死に勉強しなくてはという迷いもある。

サークルと勉強の両立が難しい (B 層)

「大学生活の中では、とくに、サークル活動に重点をおいている。サークルと勉強の両立が一番よいことだと思うが、実際のところ勉強の部分がおろそかになってしまっている。就職がやはり不安である。今は、とりあえず一般教養を少しずつでも進めている。

食事の面でも、朝食抜きや外食が増えており、健康の面でも不安がある。お金が足りないので自炊が一番よいと思う。」

- ・サークルと勉強の両立が難しい。
- ・就職の不安がある。
- ・食事抜きやお金が不足することでの生活不安がある。

現状は満足。友達と夢を共有している (A 層)

「同じ夢、教師を目指すといった友達と一緒に勉強するのは、すごく刺激になるしお互い同じ夢をもっているのだから、それに対する不安や悩みを相談しやすいので大学生活は充実していると思う。また、サークルやアルバイトでは、様々な年齢の人と出会うことができ、働くことの大切さに気づくことができた。お金を大切に使うとか、いつも部屋をきれいにしておこうとか、寝坊しないで学校に行くとか、当たり前なのが当たり前になるようになった気がする」

- ・友だちと同じ夢を共有できている。
- ・サークルやアルバイトで、人との関わりで学んでいる。
- ・生活のリズムができている。

私のゼミは、A 層が女子に多く、男子学生に B 層の傾向が見られる。そして、C 層「自らの力で現状を打開することは困難であり、周りからのサポートが本格的に必要な」という学生も見受けられた。

従って、ゼミの今後の活動で、どういう傾向をみせていくのか先の見通しが立てにくかったが、お互いの層の交流によってゼミ活動も左右されると考えていた。

ゼミは、各個人の意志と希望によって構成されているが、個人と個人の繋がり、関係性の広がりや考慮して、研究の基礎組織として、グループを作ってみた。ゼミ生の希望で 15 名 (男子 7 名、女子 8 名) を男女混合で 3 名ずつに分け、5 つのグループを編成する。前期は、ゼミ長を中心にアトランダムに編成して出発した。

2 年時に小林ゼミの総合演習で学んでいた学生もいたことで、ゼミ長の選出や係・仕事の分担などスムーズに決めることができた。グループや係については、希望によって前期と後期で編成しなおしていくことを確認した。

(2) 「ゼミ活動計画」の具体化

1 回目 (4 月) にゼミ活動について、次のような方針を提示して確認していった。特に、異論もなく計画案を了承して進めることになった。

ゼミの活動では四つの柱を具体化する。

- 実践記録の読みや分析を通しての学び
- 教師としての実践力をつける実演的な学び
- 文学・詩を通しての学び
- 現場との交流を通しての学び

これらを具体的に実践していくために、「小林ゼミの活動計画案」を示した。係・仕事分担表を基に全員の仕事・係を希望とジャンケンで決める。

- ・ゼミ長 ・副ゼミ長 ・会計 ・議員 ・選管
- ・企画・レク ・ニュース
- ・そのほか...必要に応じて ・コンパ ・合宿 ・旅行調査・研究.....前期は広い研究、後期は「卒論テーマ」にしぼって
- ・テキスト・文献学習 (二冊)
『こんな実践できたらいいな』⁽⁶⁾
『教育実践講座』⁽⁷⁾
- ・図書感想を書く ・レポートを書く
- ・論文を書く ・創作 (詩・童話・紙芝居など)
- ・新聞・社会問題・ビデオ (教育番組、特集番組) 施設見学.....学校現場・研究会へ参加 (は 2009 年の総合演習・小林ゼミで実施している)
- ・学校・幼稚園 福祉施設 養護施設
ひいらぎ養護学校 (半田) ・半田博物館
・杉本美術館
新美南吉資料館

美浜生涯学習センター ・ 図書館

レク・お楽しみ会

合宿（前年度、半田市勤労福祉会館にて2010年2月に総合演習 ・ の合同ゼミとして実施）

- ・ スポーツ
- ・ ビーチランド ・ おもちゃ王国 ・ 美浜海岸
- ・ 映画
- ・ 大学祭への参加
- グループ活動・グループ発表
- ・ テーマ学習
- ・ テキスト・文献発表
- ・ 調査・研究・まとめ・発表
- その他

教員採用に向けて

- ・ 『教友ゼミ』への参加など
（教友ゼミとは、日本福祉大学の教職課程センターのキャリア教育としての教員採用に向けた自主講座）

年間計画（前期のおもな活動）

の活動を分野ごとに整理すると次の5つに集約される。

- (1) スピーチ・新聞コメント・広い学び
- (2) テキスト「実践分析」「教育理論」……グループごとの発表
- (3) 学校訪問・研究授業参観
- (4) 研究発表
- (5) 合宿（前期の活動が終わったところで）

「ゼミへの希望」を聞いたところ、次のような意見が出された。

- ・ 「2年の時みたいにみんなで仲良くやっていきたい。また、ニュース係になったので、毎回出せるようにがんばりたい。」
- ・ 「新しいゼミで、2年時とは、また違った雰囲気を大切にがんばって行きたい。去年できなかったことをゼミでやっていきたい」
- ・ 「人前で話したり、討論が得意でないこの2年間で克服して、自分の考えを話せるようにしていきたい。同じ教員を目指す仲間として励まし合っていきたい。」
- ・ 「みんなで仲良く楽しいゼミにしたい。将来のこと

をしっかりと考え、みんなで高めながら楽しむときは楽しむ、メリハリのあるゼミにしたい」

- ・ 「勉強ばかりだと、息がつまりそうなので、たまには息抜きのゼミの時間があればありがたい。」
- ・ 「教員採用試験の対策などの紹介をしてほしい。現役で合格し、常勤になれるとは考えていませんが、このゼミを通して教員になった際に役立つようなことを学んでいきたい。」

こうした学生の要望などを基に、ゼミ活動を進めていくことにした。

しかし、出発時には、ゼミでの学びの「自立」というテーマで、学生と一緒に話し合うことができなかった。また、学びと自立の関係が焦点化されないということでの迷いがあった。私のゼミ活動の具体化が、はたして自立につながるような批判的な学び、学び直しができるのだろうかと考えていた。

4月当初のゼミ生の傾向として、ゼミでの授業も他の講義のように教師が「教授する」立場であり、学生は「学ばされる」「専門的なものを多くを受け入れる」という雰囲気が感じられた。この傾向を様々な活動によって、学生が自らを見つめ直し、より共同的であり、批判的な学びとして進めていこうと考えていた。

池谷壽夫は『今日求められているリテラシーとは何か』で次のように述べている⁽⁸⁾。「今日若者にはどのような「リテラシー」が求められるのであろうか。結論から言えば、それは、コミュニケーション・リテラシー、市民的リテラシー、学問的あるいは知的リテラシー、情報消費リテラシー、の4つに集約できる。」

池谷壽夫の「リテラシー」という概念が私のゼミ活動にどう当てはまるのか。リテラシーを身につけるためには、様々な体験を基に学生自身のものとして「学び」を作り変えていくということではないかと考えた。四つの柱の計画に則していくつかの実践を総合的、複合的に重ねていき、より自立的な青年像、学生像へアプローチしたいと考えていた。

「ゼミ活動」の事例と内容

前期のゼミ活動の内容を、大きく次の5つの分野に分けてまとめた。

- (1) 交流・社会性を深めていく活動
- ・ 一分間スピーチ、「新聞記事」を論評する

「一分間スピーチ」は、大学生活の中から、他のゼミの学生に伝えたいものを毎回用意して、全員で交流していった。

「新聞記事を論評する」は、学生への課題として「一週間の新聞ニュース」から、自分が一番気にとめた記事を用意して、自分のコメントを発表していった。また、一つの記事に対して、お互いに論評・コメントを出し合った。例えば、「学校のセクハラ・パワハラ」という論評記事に対して意見を出しあうのである。政治（選挙）への参加についても話題にした。その他、様々な活動や集会の紹介をしたり、現場の教師の教育研究集会への参加を促していった。

(2) テキストでの学習

・二つのテキストでの学習 (4月～6月)

【教育実践論】教育論……毎回、一つの実践論を取り上げていった。担当したグループ3人で読み込んで、まず、担当が感想を発表する。そのコメントに対して他の学生から感想意見を求めて分析的に読み込んでいくというスタイルを続けた。

取り上げた「実践論」は次のようなテーマであった。
三上満 『学校ここにある希望』

(1994年4月新日本出版社)

高垣忠一朗 『大事な忘れもの ― 登校拒否のはなし ―』

(1994年8月京都法政出版)

秋葉英則 『いま、わが子はたしかか』

(1984年2月清風堂書店)

この中でも『いま、わが子はたしかか』は、学生も自分に惹きつけて読み込んでいった。ここでの意見交換は、

- ・「子どもと共に共感しあう指導者、豊かな個性をもつユニークな指導者、生活をエンジョイしている指導者と書いてあり、子どもと一緒に成長していこうとする大人になりたいと思った。また、教師だからといって子どもの前面に立つのでなく、子どもの支えとなるような教師像が求められると分かった。」

といったものだった。「分かった」「考えてみた」と言う感想が多く、批判的な読みよりそれぞれの教育論を受け入れるという傾向が強く感じられた。

【実践集】……毎回、一つの実践報告を取り上げていった。担当したグループ3人が事前に読み込んで、レポートにまとめて発表し、他の学生からも感想意見を求めて分析的に読み込んでいくというスタイルを続けた。

取り上げた「実践記録」は次のようなテーマであった。
『メディア・テラシー送り手の意図を批判的に読み解く』

(中田唯一・名古屋児童言語教育研究会)

『ごみから暮らし方と環境を考える家庭科の授業』

(石田佳子・愛知家庭科授業研究会)

『「甘える力」は人間への信頼』

(竹沢清・名古屋障害児児童研究会)

ここでの竹沢の記録は、障害児教育の実践であるが、特別支援の免許を取っている学生もいて興味関心が強くあった。

- ・「先輩教師の実践の本を細かく読み深めてレポートした。現場の先生ならではの体験が書かれていて読みやすかった。自分の意見をまとめることができた。教師になるのに期待がふくらみ不安も生まれた。」
- ・「竹沢先生は直之という子どもに目を向け、発達障害と気づいた。けれど、一人で抱え込まずに学校内の教職員全体でサポートしていくことの大切さを学んだ。甘やかすことは簡単でも、甘えることが難しいということが印象に残った。教師の個性を生かし他の教員と補い合いながらやっていくことが大切だと感じた。レポートした3人のまとめもすごく分かりやすかった。」

といった感想、意見があった。「実践を知った」「実践の工夫が分かった」という感想が多く、自分なりにどう分析判断するのかという点での議論にはならなかった。

このように、ゼミの学習テキストとして、6月まで、この二つを基に進めていたが、「研究発表」をやることになり、途中で中断した。後期でもこの学習は再会し、当初の計画にあった「小説・詩」については、ほとんどやれなかった。それで、新しいテキストとして『父と暮らせば』(井上ひさし)の戯曲を取り上げることや社会科学のテキストについても取り上げてみたいと提案してみた。ゼミでの時間が取れなく前期では取り上げられなかった。

(3) 小学校見学

美浜町の布土小学校へ参観 (6月29日)

布土小学校の授業研究発表会に参観できる機会が持てたのは、美浜町の小・中学校へインターンシップ校としての繋がりがあったからである。布土小学校作成の「学習指導案」を事前に貰い、どんな授業なのか教科単元などを知ることができた。従って、どのクラスの授業参観

するのか、どこに着目するのかを決めて参観できた。

「公開授業参観」についての、学生の感想を紹介したい。

- ・「前期のゼミで学んだことは、布土小学校に行き、現場の教師の実践を目でみることで、小学校の今の現状を知ることができて、授業などで聞いていることと実際の比較ができたことが自分にとってプラスになった。」
 - ・「実際に小学校にも足を運び、体験学習をすることができた。考えているだけでなく実際に小学校へ行くことによってイメージが浮かんだ」
 - ・「なかなか見ることができない公開授業を見ることができ、とても貴重な体験となった。」
 - ・「実際に授業を見るという機会が今まであまりなかった。子どもの答えが発想豊かであることや、高学年になると挙手や発言が少なくなってくるので教師の助言が重要になってくるということが学びました。」
- 学生達の感想にあるように、2年生の「インターンシップ」とは、少し違う感じでより身近なものとして受け取り、授業研究や自分達も教育実習があるのだという自覚へ繋がったように感じられた。

(4) 研究発表

6月後半から7月の「研究発表」とは、対外的なものではなく、ゼミの中での発表として位置づけていた。ここでの「研究・論文」発表については、卒論へ繋がる研究としては、最初の発表になるということを念頭に置いていた。ゼミ内の発表であり、個人研究でもいいと提案するが、「グループごとに取り組んでみたい」と要望があり、ゼミの話し合いで、4月にできたグループで進めることになった。とりあえず次の3つの条件を提示した。

- ・グループでテーマを決める。
- ・進み具合をレジュメで書く。研究発表の「序論」「本論」「結論」の構成にして事前に提出する。
- ・発表日を1ヶ月後として、予定日を決める。

この時期に学生に事前に調査した「どんな研究をしたいのか?」というアンケートには、次のような個人での研究テーマなどが書かれていた。

- ・「いじめ・不登校の数 ・モンスターペアレントへの関わり ・障害をもった子への授業の仕方」
- ・「子ども達の将来の夢 ・子ども達の流行している遊び ・子ども達の習い事について」

・「トワイライトスクールと学童 ・小学校における外国語活動について」

・「子どもへの親のサポート ・家族支援について」

各学生の問題意識の多くは「子どもをめぐる課題」である。課題として、漠然としているし、揺れているし、何が自分の課題なのか見えにくいテーマが多いと感じられた。

3人のグループの研究テーマは、より問題意識の強い学生のテーマで決まっていた。子ども達の生活の様子を知りたい、その実態把握のためにアンケートで集約するという研究スタイルができていった。

研究テーマ、研究の方法、進め方にあいまいさを感じられたが、とりあえず、1回目の研究であり、学生の動きを見守ることにした。どのグループも1ヶ月ぐらいの研究時間ということで、各グループとも、子どもの実態を小学校でアンケートを採って、それを基に分析するというふうに進んでいった。Cのグループだけが「学童保育とトワイライト」の調査のために各関係機関へ働きかけていた。

【グループの研究テーマ】

Aグループ「給食のあり方について」

Bグループ「子どもの遊びについて」

Cグループ「愛知の学童保育と名古屋のトワイライトの違い」

Dグループ「小学生の習いごと事情」

Eグループ「小学生はどうして私服なのか?」

ここでは、Aグループ「給食についての研究」の発表(7月)について、その研究の様子、発表会について紹介しておきたい。

この研究グループの3人は、「子どもの食事はどうなっているのか」その中でも「学校給食」について調べてみることになった。

・研究内容.....子どもの食生活について取り上げる。その中で給食のあり方や役割について調査する。

・研究方法.....布土小学校の全児童にアンケートをとり分析する。

愛知県の栄養教諭・学校栄養職員協議会(小牧市)に訪問して、学校給食の工夫について栄養士にインタビューする。

・研究のまとめと発表.....アンケートの結果を分析し、

合わせて栄養教諭のインタビューについてまとめ、発表する。

発表の後、ゼミの中で感想、意見を交流した。主な意見や感想。

- ・「図などがあって読みやすかった」
- ・「アンケートを小学生だけでなく、大学生や親の世代にも採って比較したら分かりやすくなると思う」
- ・「布土小の子どもの調査だけでなく、小牧の栄養士にも調査をしているので良かった。全体的にとてもわかりやすかった。テーマとお菓子などの関連があると良くなると思った。」
- ・「場所は布土小と小牧市と変えて生の声を聞くということをしていた。これは、次へつなげる経験になると思った。給食とお菓子のつながりが書けたらもっとよくなると思った」

これに対する発表者の感想。

- ・「全体的に自分たちの考えが書いてなかったことが気になった」
- ・「比較を入れて、自分達の意見を加えて書くことでもっと分かりやすい発表になると思った。」
- ・「最初の問題提起と最後のまとめと対応させる。布土小学校の子どもへのアンケートと小牧の栄養士さんに聞いたが、結びつきが弱いし、必然性が無いのかもと思った。給食とお菓子の関連が分かりにくくなっている。もっと、比較研究したものにしていく。」

これらの意見や感想からも、1ヶ月間、グループ研究に必死に取り組んだ様子や研究のまとめに苦労したことや研究の不十分さを強く感じ取ったことが伝わってくる。

全部のグループが発表し、それぞれのグループへ意見、感想が終わったところで「研究発表」の全体について再度、交流を行った。

「研究発表」全体に対する意見・感想。

- ・「研究発表では、実際にアンケートを採ったり、まとめたり、貴重な体験だった。研究の仕方・定義の根拠など多くのことを学んだ。他の班のレポートを通して、自分の班のレポートの研究の仕方、まとめ方が分かりためになった。」
- ・「グループごとのレポートを見ても、思ったけど自分たちの意見をあまり言えなかった。先生にとっさに意見を求められてもすぐに言えない事もあった。読みながら聞きながらいろいろ考えて聞かなければ

ならないと思った。」

- ・「グループでのレポートでは、アンケートを採ることからはじめ、それを整理し、まとめて発表するというふうに、短い時間でがんばりました。しかし、不十分なところがたくさん見えてきたので、もっとふくらませ、よい論文になるように研究を深めていきたい。」
- ・「前期のゼミでは、特に研究レポートを作った。そのやり方やまとめ方が勉強になった。実際に小学校に行きアンケートを採り、グループでまとめたり、それを発表して、自分では気づかなかった視点に気付いた。比較対象や根拠がないと、納得させることは難しいと思った。卒論では、こういう研究をもっと深めて、さらにアンケートしたり文献で調べてやっていかなくてはと思った。今回のグループ研究でもよい勉強になった。」

私は、これらの感想から自分や自分達の課題が身近に捉えられていると思った。研究することで、それまで知らなかったことが、明らかになっていく。研究のおもしろさ、楽しさが湧いてきて、研究して良かったと思いはじめているのである。しかし、自分たちの研究の不十分さや広い知識に裏打ちされていないもどかさも湧いてきている。それは、なぜなのかという疑問も湧いてきて、研究力をどう伸ばしていくのが課題になってきていた。

次のような指摘がゼミの研究にも重要だと考えた。

藤原帰一は『研究力』をつける三つの方法』として「第一には、いろんなことを議論して一緒に考えることのできる仲間がいること。第二には、本を批判的に読むことです。その本によって何が達成されて、何が達成していないかを見抜くことです。第三には、教師を使うことです。教師に突っかかっていいから、自分の仕事に必要な情報や判断を引き出す事です。」⁽⁹⁾

ここで指摘してある、第三の教師に「批判的に挑みかかる」という姿勢は、感じられなかった。「研究をやってみて、始めて気が付いた」という域にとどまっていたり、「アンケートの不足やグラフや表にしたが、まとめ方に不十分さがあつた」ということなど、批判を素直に受け入れるという姿勢があり、自分たちの研究も、他の研究も「新しい知識を得た」という域にとどまっている感じであった。「再度、不十分な点の記述を補い、研究をもっと広くきちんとまとめる」ということで、次へのステップに繋がっていくのだと考えていた。

研究の仕上げについては、後期でさらに不足したところの書き加えなどを進めていくことになった。研究発表のために協力してもらった各小学校へ反映できるようにする事も配慮して最終報告書としてまとめて、今後もさらに研究を続けていくことを確認していった。また、前期は、グループ研究の良さが出ていたが、後期は、個人研究についても進めることを提案しておいた。

(5) ゼミの合宿

後期にむけての「ゼミ合宿」を企画した。ゼミ合宿は、2010年8月2日～8月3日大府市勤労文化会館で実施した。

合宿の目的としては、学生との話し合いで、

ア お互いに学び合う。

イ ゼミ合宿を通して交流を深める。

ウ 自立、自治のちからをつける。

ということになった。また合宿を大きく、3つのパートとして計画した。アの学びには、現場の教師の講演を計画していた。「なぜ学ぶのか」では、社会科学の基礎を学習したいということ視野に入れてどんなテキストにするの迷っていたが、「資本論」の導入的な学習について考えていた。

現場の教師の実践・話を聞く……名古屋の教師で
作文教育を長年やってみえる方の講座

「悩み」などを共有するために話し合う。テーマ
「愛と人生」として教師と学生の提案を基に話題を
深める

将来の仕事……教員採用に向けて「自主的な講座」
として設定

また、ゼミ合宿では、一人一人の役割・仕事を分担しあうことを確認した。費用についても、公立の施設で負担が軽くなるように配慮した。

そして「愛と人生」は、自由な交流をするというねらいもあったが、何を話し合うのか漠然としていた。そのために学生の生活実態の把握をしたいと思っていた。できればそれを基につこんだ議論ができることを考えていた。

そこで、学生へアンケートを採って、それを基にした話し合いで焦点化したいと考えていた。

従って、「愛と人生」のコーナーは、学生の一人一人が二十歳までどう成長してきたか、二十歳までどう人生に向き合ってきたか、どう生きていこうとしているのか

が追求できたらと考えていた。しかし、担当の学生と事前に準備する時間がとれなかった。

私自身も問題提起として「詩」を創作した。それらは、私の、幼児期から青年期までの生い立ちに基づいたもので「愛」をテーマにしたものだった。

私と学生の問題意識にずれがあるかもという思いもあったし、「愛と人生」というテーマも漠然としたもので視点に突っ込みがなく焦点化されてないかもという思いもあった。

当日、学生に自分を見つめ直すために「アンケート」を書かせておいて、その項目で「話し合い」「交流」していくということになった。

アンケートの項目としては、10項目にしたが大きなテーマとして『自分らしく生きるとは——愛と勇気と友情と正義そして連帯を——』を掲げた。

a 「悩み」

・あなたは、今、壁になって見えるもの悩んでいることはありますか？

b 「就職・教員採用」

・あなたは、就職・教員採用でどんなことを描いていますか？

c 「アルバイト」

・あなたは、どんなアルバイトをしていますか、アルバイトでの悩みは？

d 「サークル」

・どんなサークル活動をしていますか、そこは、楽しいですか？

e 「自炊・一人暮らしの生活・通学」

・生活は、うまくいっていますか？

f 「お金」

・お金は、うまくまわっていますか？

g 「友人」「恋人」

・人間のつながり関係は うまくいっていますか？

h 「大学の授業」「テスト・レポート」「模擬授業」「ゼミ」

・「学び」「勉強」は、うまくいっていますか？

i 自己アピールと「成長」

・自分なりに自慢できそうなことは？

j 「趣味」「やってみたいこと」

・この夏、今後、楽しみたいことは？

これらのアンケートに基づいた話し合いが進行したが、担当の学生2人の提案が「将来の自分を描く」というも

のであった。そのため将来の恋愛や結婚なども話題になった。初恋のことで盛り上がりそのことからうち解けた雰囲気作り出せた。

その中で、多くの学生の悩みとして出てきたのが、アルバイトのことであった。

「家庭教師をやっているが、勉強の教え方が難しい」「アルバイトの掛け持ちで、けっこう疲れる。自分の時間がつくれない」「飲食店で働いていて、遅くなったりする」など同じような立場での、悩みがあり、交流でお互いの様子が知れて分かり合えたという感想が多かった。アルバイトと学費や貧困問題などの議論へ今後発展させていきたいと考えていた。

教員採用対策について

ゼミ生の声として「職につけるかどうか、勉強が進まない」「自分の将来がどうなっているのか」といった共通する悩み、課題を抱えている。

ゼミの中に「教員採用対策」について、学生に準備させ、自主講座として設定した。

担当を二名決めた。二人は、「教友ゼミ」に参加しているし、名古屋市で開催されていた臨時教師の会の教員採用対策にも参加していたが、過去の採用試験問題を解くことと集団面接の模擬を実施する企画を考えていた。

ここでの感想は、

- ・「自分たちが用意した問題にみんな積極的に関わってくれた。特に、面接の討議では、君をはじめ、君などがリードして進めてくれたのでよい討議になったと思う。また、みんなで、テーマを決めて話し合いをしたいと思います。」
- ・「教員採用についても、自分がいかに曖昧に勉強していたかということを知り知った。勉強不足のところも多くあり、これから、計画を立てて自分に厳しく勉強していきたい。このゼミ合宿のおかげで自分について考えることができた。」

アンケートの中の「自己アピール——自分なりに自慢できることは？——」では、

「何もない」「探してみます」「そんな、大した人間ではありません」と言った「自己肯定観」に欠けた学生や、「しっかり周りを見る」「幼稚園からピアノを続けている」「誰とでも、コミュニケーションをとれる」「計画性がある。人の話が聞ける」などという控えめな発言だった。「それなら自慢できることは、アルバイトも続けている」と

発言をきっかけに、「教員採用では、自己推薦アピールが求められる」ということで、書いてもらった。

自己アピールの内容については、交流する時間が無く、公開して話し合えなかったが、それなりに「自己肯定感」が出ていることが伺われた。

ゼミ合宿のまとめ

ゼミ合宿の最後に「ゼミ合宿の感想」を出し合った。

- ・「みんなの人生観や初恋の話を聞いてそれぞれいい人生、体験をして歩いているんだなと思いました。このような会で、自分の過去のことをふと思い出してみるとなんだか懐かしいことが思いだして昔にもどりたくなりました。」
- ・「みんなの、今までの初恋などを聞いてとても楽しい気持ちになった。また、みんなちゃんと将来のこととを考えている人だと思った。みんな教員採用試験の勉強をしていることを知り、自分もやらなくてはいけないという気持ちになった。」
- ・「自分の初恋について、みんなにしゃべることが、あんなにも恥ずかしいとは思わなかった。先生の詩集の文章には、自分を振り返って見て、共感できる部分があった。みんなの人生観を聞いて、人それぞれ違った目標があるんだと思った。」
- ・「みんな同じような悩みをもっているんだなと感じた。私だけでなく、他の人も勉強やアルバイトで悩んでいるからみんなで、助言し合うことで気持ちが楽になった。普段の様子を人前で話すということは恥ずかしいことなのでなかなかうまく伝えることができなかつたけど、もっとみんなのことを知りたいなと思った。先生の一つ一つの詩にいろんな思いやその時のよい思い出が伝わってきた。」

ゼミ合宿のまとめとして「文集」を作成したが、ゼミ活動に積極的に参加した学生の感想文に合宿の成果を感じ取れた。

- ・「ゼミ合宿に参加して、ゼミ合宿を通して、自分の勉強不足を感じたが、加藤先生の現場の話や教員採用の集団討論を通して教師になりたいという気持ちが強くなった。これまで教師に向いているかと考えたことが何度もあったけど、先生の話聞いて少し、不安がなくなったと思った。「自分が本音を出した分、子どもも本音を出す」という言葉がとても、印象に残った。この合宿中に何度も書いたり、発言す

るということがあった。話すスピード、目線、短い時間の中で自分の伝えたいことをうまく伝えることの難しさなど感じた。でも、みんなの意見や姿勢から、参考にすべきところがいくつかあり、刺激を受けた。自分に足りない力やこれから先に身につけなければいけないこと等再確認できた。夏休みを通して成長できたらいいと思った。二日間とても充実していました。」

私も合宿を通していくつかの感想を持ったが、とくに強く感じた一つに教師としてのモデル像をどう作っていくのかということがあった。学生の感想からも、それが伺われた。ゼミの合宿で、現場の教師の話聞いて、その教師の人物や子どもの作文に惹かれていることが分かった。現場の生き生きとした教師に惹かれるのはどうしてだろうか。学生自身が求めている大人としての「教師像」を重ねているからだろうと考えていた。

青年・学生が広い社会、世界と出会いその中で自分を位置づけようとするとき、身近で尊敬できるモデル教師の存在は確かに必要なのかも知れないと考えた。

もう一つは、合宿を学生の夏休みに入る前に実施することで、自分なりの課題がもてるような方向づけができればと考えていたが、そういう姿勢が感じ取れた。

一人一人の課題として、採用試験に向けての勉強から脱して広い意味での「学び」「勉強」をして貰いたいと思っていた。そのためには、社会科学についての基礎学習もしたいと考えていた。そのため合宿では、夜の時間帯を使って社会の構造・仕組みを学ぶ意義について『資本論』を紹介し社会科学の導入についてふれたが、私の説明や提起が不十分であったためかゼミ感想からは、「広く勉強したい」「本をもっと読む」といったものにとどまった。

ゼミ活動のまとめと課題

学生像(層)の変化はどうか

前期のゼミの活動の感想をもとにC層、B層、A層は、ゼミ活動でどう変化したのかを見てみよう。

C層からB層へ

- ・「前期のゼミで学んだことは、小学校に行き、現場の教師の実践を目で見ることで、小学校の今の現状を知ることができて、授業などで聞いていることと実際の比較ができたことが自分にとってプラスになっ

た。また、研究で小学校でアンケートを採ったりした。発表で、自分達で調べることで、小学校の子ども達の生活についてよく分かるようになった。今後の課題としては、もっとゼミの人達とコミュニケーションを取れるようにして、もっと協力してゼミを行っていきたいと思う。また、今回の研究発表で見えてきた改善点を後期のゼミに生かしていきたい。」

当初は、「C層」とみてきたが、この文章からも前向きな姿勢が感じられる。その理由として、一番大きかったのは、ゼミでの「研究発表」を3人で共同的に進めたで現場で働いている人に質問したり、研究をまとめるということにより身近に研究する仲間が身近にいることを感じ取ったように思われる。

B層からA層へ

- ・「小林ゼミを通して、多くの自分の意見を発言する機会があって、考えを言葉にする難しさを感じました。やはり、他の人が自分に興味をしめすような喋り方ができるようにしたいと思う。また、レポートや研究など、資料やアンケートを使うことがあまり無かったので、いい経験になったと思う。しかし、まだ、考えや内容が薄いと感じているので、さらに深く発言や問題提起などができるようにしたい。自分だけでなく、他の人にも力がつくのではないかと。思う。どんどんこのようなことへの挑戦ができたらいいなと思いました」

この学生は、自分の力不足を感じているが、研究面での共同的に進めること、他の人にも力が付くという思いが出ている。当初「B層」として見てきた。まだ、受け身の姿勢も見受けられるがかなり積極的な姿勢に変わってきている。これは、ゼミでのいくつかの経験が生きているということであり、他のゼミ生の活動の仕方視野に入ってきていると思われる。

A層

- ・「前期は、教育実践について学んだり、レポートについて書き方やまとめ方を学ぶことができた。また、小学校でアンケートを採ったり、貴重な経験ができたと思う。アンケートをもとにレポートを書くのは難しかったし、自分たちが満足してできたレポートも他の人が読むと不十分であったりすることを学ぶことができた。この経験をもとに卒業論文などをが

んばっていきたいと思う。みんなの近況がわかる30秒スピーチは、共通点なども発見できるよい機会などで続けていきたいと思う。夏休みにあるゼミ合宿はとても楽しみにしている。みんなで仲良くなれると思うので有意義な合宿にしたいです。」

この学生は、当初から「A層」として見ていた。ゼミ活動で多くを学び合ったことが、書かれ、さらに楽しみと自己肯定を創り出していることがわかる。様々な対外的な研究会にも参加していた。しかし、どうすれば、自分の力を発揮していけば、よりゼミ活動が発展していくのかが伝わってこなかった。あくまで、「学びきる」という姿勢から「どうしたら学びを伝え広げる活動」を創り出すのが課題となっている。

学生の実態・層に則して見てきたが、ゼミ活動で、A層、B層、C層の交流が深まり発展してきた。そして、大きな混乱もなく、むしろ活発にやれたのは、ゼミ長の前向きな姿勢や係仕事の分担と学生相互のゼミを支える力が前進を作り出してきたと考えられる。

「自立」の学びにつながったか

ゼミ活動への学生の自主性、積極性はどうだったかを考えてみたい。

ゼミでは、毎回、何度も「発表し合う」「意見を出す」ことを続けきた。常に「話し合う」ことが残ったようだ。ゼミの仲間との様々な交流から信頼が生まれ、自分をさらに高めていこうとする姿勢が感じ取れた。一人で講義を聞いているだけなら深まらないものがある、その感想を交換し、質問しあう機会がより保証されているゼミの良さが生かされきたのだと考えられる。ゼミの学びがどういう姿勢を創り出していったのか。与えられた課題をやっていく姿勢がどう変わってきたのかを考えてみたい。

次の言葉に見られるような自主ゼミの動きが見られるようになった。

- ・「ゼミについては、毎回の情報交換をもっと有効に活用して、お互いに、教員採用の勉強方法を交流し教育集会にも、みんなで参加できたら考えています。空きコマがあれば自主ゼミを開催して、ゼミ全体で意識を高め合っていき、可能であれば他の先生方を招いて話し合いたいと思っています。」

このように、自主学习（自主ゼミ）についての動きが出てきた。自主的な「サブゼミ」が動き出していった。5月頃から、ゼミの学生達の中から動きが作り出されて

きた。とくに「民間教育」の研究会に参加した学生や、「臨時講師の会」の教員採用対策の会に参加した学生らを中心に、「自主的学習を持ちたい」という動きが出てきた。図書館に集まって「自分達の抱えている課題を出し合うことから始めよう」と集まったのだった。みんなが学びたいものを集約して、「何か学習しよう」ということになった。こうして、自主的な「サブゼミ」が動き出していった。数回の会合がもたれたが、リーダーの不在と何を学び合うのかのあいまいさもあった。この動きの一つとして、教員採用試験対策の「教友ゼミ」の中に流れていった。

前期のゼミを通しての「自立」に向けての学びの成果としては、共感的な学びができてきたし、多少「コミュニケーション・リテラシー」が伸びてきていると思われる。しかし、自立に向けての「学問的、知的・リテラシー」としては、まだ時間がかかり、今後の課題と考えている。

ゼミの中での「キャリア教育」をどうしていくのか

3年時のキャリア教育では、広い立場で職業、仕事とは何なのかを問うことが求められていると思っていたが、「教員採用で合格したい」という願いが先行して本来のキャリア教育を問えないまま進んでいった。こうした中で、教員採用に向けて、確かに身近になり、より自覚的になったし、自分もゼミの仲間と共に立ち向かっていきたいという意識ができてきたと思われる。一方、「教友ゼミ」と時間が重なり木曜日の午後のサークル活動から離れて、時間を作る学生も出てきた。

大学でのキャリア教育を考えていく時、「国民のための大学づくり」という立場で考えると次のような指摘は、重要ではないだろうか。

光本滋は、「大学は、高校までに身につけるべき能力を欠落させた学生を受け入れ、基礎学力形成から『キャリア教育』まで世話を焼き続けるのが実態です。こうした、丁寧教育は、学生の主体的な成長を妨げており、さらに、『何を学んだのか』ではなく『何ができるようになったのか』を目標として出口管理を徹底する大学教育への統制にも通を開く危険があります」と指摘している⁽¹⁰⁾。

日本福祉大学でも、学部ごとに様々なキャリア教育を進めている。私も、迷いながらも子ども発達学部として「教員採用」に向けてゼミでも関わってきた。竹内常一は、キャリア教育のあり方として次のように強調してい

る。

「キャリア教育はかつての『道徳教育』にとって代わる、新教育基本法下の『道徳教育』であるといっているだろう。……『望ましい職業観、勤労観を育てる』といっているからである。この『望ましい』というのは、一人ひとりにとっての、またすべてのものにとって『望ましい』ものでなく、誰かにとっての『望ましい』もの、端的にいえば、権力をもつものにとって『望ましい』ものであるからである。」⁽¹¹⁾

さらに、竹内常一は「『キャリア教育』の展開のなかに必要なことは、キャリア形成の成功と挫折の経験を、また自己実現の成功と挫折の経験を共同化し、一人ひとりのキャリア形成可能にする働き方・生き方とはなにかを集団的に追求していくことである。」と強調している⁽¹¹⁾。

確かに、大学生が当面している就職難の壁は、一人一人の学び方や生活の仕方に強く影響を与えている、この問題に対しゼミとしてどう対処していくのかも問われている。日本から、世界の動向（ILO・国際労働機関）に目を向けると「人間らしい労働」という目標があり、「労働者がコストではなく財産である」という主張が目されている。まず、「教員採用に合格する」「仕事につく」という流れの中に「良質の仕事」を目指すことが重要であり、「どういう教師になっていくのか」問われてきているのではない。今後さらに様々なことに対応できる「学び」の構築を作り出し、継続していくことが重要ではないかと考えている。

学生と共同的に作り出しているのか

前期のゼミ全体を通しての学生の感想がある。

- ・「小林ゼミのみんなは、明るく一人一人意見をしっかり持っているのがよい刺激となった。また、将来に向けて前向きに取り組んでいるので、自分もがんばろうと思った。みんな、元気に活動し、自分の意見を出していけるように積極的にがんばりたい。」
- ・「自分の今後の課題として、グループで行った研究を深めていきたいと思う。また、実践記録を読んでいく中で、文章を読む力がないと書く力も使えないと思うので、本を読んでいこうと思った。さらに、読んだことから自分の考えを言えるようにしていきたいと思った。」

この感想からも確かに「学び」の共同化へ繋がったと

感じ取れる。

ゼミがどう作られ、活動してきたのかを振り返る時、ゼミ活動をより活発にして、共同的な「学びの場」としていくためには、次の指摘は納得できるし、重要だと考える。

美島ゆりの「未来の学びのための環境をどうやってデザインするのか、3つの要素『空間』『活動』『共同体』から考えていく」の中の「活動、1. 活動の目標が明快であること。2. 活動そのものにおもしろさがあること。3. 葛藤の要素がふくまれていること。空間、1. 参加者全員にとって居心地のよい空間であること。2. 必要な情報や物が適切なときに手に入ること。3. 仲間とのコミュニケーションが容易に行えること。共同体、1. 目標を共有すること。2. 全員に参加の方法を保障すること。3. 共同体のライブラリーを作ること。」⁽¹²⁾

ここで述べている、活動、空間、共同体という三つの視点で、さらに後期の活動に繋がるようにしていきたいし、「自立」に向けた「学び」の構築へ向けて活動を飛躍させていきたいと考えている。

今後の活動に向けて

ゼミ活動について、前期の実践の内容をもとに分析し、ゼミ活動について検討してきた。今後もできるだけ、学校現場との交流や訪問など企画していきたい。なお、前期でとりあげることはできなかった「文学」についても、ゼミの学生の希望する作品について取り上げて研究を深めてみたい。できたら、ゼミの学生による小説や詩の創作も余裕があれば挑戦してみたいと考えている。

4年生になると教育実習や卒業論文を書くことなどが控えている。そして、教員採用試験も待ちかまえている。教員になっても、現場では、若い教師としての力を発揮できにくい状況もあり、より現実的な学習にしていきたいことも求められている。ゼミ活動の限界もあるだろうが、課題に対して広く深く追求していくこと、ゼミ生の主体的な活動と共同的な学びになるようにしていきたいと考えている。

学生から提案された「楽しさ」「ふくらみ」「つながり」「学び」ということをスローガンにして、ゼミ活動を青年そして成人へ向けて「自立」をテーマに創造的に積み上げていきたいと考えている。

最後に、ゼミ活動の展開、活動の飛躍について考えてみたい。

私は、学校現場にいる時から全国生活指導研究協議会に関わってきた。その間「集団づくり」の方法、技術を掘り下げてきた。それらの方法、技術は、大学のゼミでの活動にも生かされているのだと考えているが、2010年の全国大会の基調提案【反貧困】に取り組む子ども集団づくりの課題を明らかにしよう⁽¹³⁾

この中の『アソシエーション』という概念は、今日のゼミの進め方にも当てはまるのではないかと考えている。「……『必要と要求にもとづいてアソシエーションを立ち上げる』……」とう柔軟な組織と運動が求められているのだと考えている。

つまり、アソシエーションとは、サークル単位、あるグループ単位から行動を広げていくことであり、専門演習ゼミも内から外に向かって行動を起こす時に、次の飛躍があるのだと思っている。それは、教師の手から離れ、独立した、まさに自主的な活動になっていき、人と人をきり結び活動と活動を繋いでいくものとなるだろう。

私のゼミ活動で何をやってきたか。何をやったことで、「学び」へ「自立」へに繋がったのか。ゼミ活動の事例、その中でも、ゼミ活動の内容を主としていくつかの『学生の感想文』をもとに追求してきた。今後も、ゼミの活動の意味づけを考え、より分析的な視点からいくつかの『文献・参考図書』を研究して、より広い立場で「ゼミ活動」を考察してみたい。

日本福祉大学には、先輩や同僚の教師達によって、個人的で優れたゼミ活動が作り出されてきたし、作り出されている、学び合うことも数多くある。今後もより広い立場に立って、実践を進め、他のゼミ活動に学びながら「自立」に向けてのゼミ活動をより充実させていきたいと考えている。

最後に、この報告をまとめるに当たって、「ゼミの学生」の感想・文章などの引用など多くを使用することを協力してくれたことに感謝している。（『子ども発達学論集』への掲載にあたり、「日本福祉大学保護情報保護規則」に照らし、ゼミの学生の報告を匿名で記すことなどの同意書を取ったことを付け加えておきたい。）

注

- (1) 『2008年度ゼミ教育に関する調査報告書』の（2009年3月日本福祉大学全学開発機構 福祉経営学部 32頁）
教員対象の「ゼミ状況調査」には、自由記述に貴重なコメントが紹介されている。

- (2) 『日本福祉大学 子ども発達学論集』第2号（2010年1月日本福祉大学子ども発達学部）の『FDフォーラム』

FDフォーラムの教師と学生の生の声・思いが集団的に議論される場になって、広い意味での授業であり、学びの最前線になっているのではないかと考える。特に、フォーラムの設定へ向けての準備段階に注目したい。担当教師と実行委員の学生テーマ設定、会の持ち方などの諸準備の中に子ども発達学部で「何をテーマにするのか」などゼミでの「学び」示唆が見えるし、リーダー指導なども含めてゼミでの「学び方」の共同的な側面をもっていると考えられる。

- (3) 専門演習（小林信次のゼミ活動シラバス）

一 専門演習のキーワードに「教師の実践と授業」「教師の指導と技術」そして、「文学と詩」を取り上げました。

目的・内容は、教師を目指す「子ども発達の学生」として、教師としての実践力をつけることを第一に考えたゼミ活動として運営していきます。ゼミの中心は、教師としての力量づくり、教師としての内面づくりという課題がありますが、まだ、教師になることに迷っている学生も、「文学と詩」なら共通して学べるのではないのでしょうか。

私は、長い間、現場の教師として、子ども達と共に、授業をやり、生活指導・集団づくりをやってきました。専門演習に二年間関わるといことで、私の体験や経験を生かしていきたいです。全国には、多くの優れた実践記録も残っています。それらを、ゼミの場で取り上げて、どう身につけていけるのか、分析力や実践力がついていくような共同的な学びの場にしたいです。「文学と詩」については、ゼミの学生の興味・関心のあるものを取り上げて、「読み」を深めたいです。なお、小説や詩の創作も試してみたいです。

以下 省略

- (4) ゼミの学生の希望調査

ゼミの希望調査（学生の希望調査は、非公開の文書で教師が希望者の中からゼミ生を決定する）

「2年生の前期で実際に指導案を作り、みんなの前で初めて授業を経験させて頂きましたが、思うように授業が進まず、想定外の意見や行動をとられたとき、どのように対応しているのか分かりませんでした。教壇に立つことの難しさを痛感しました。

専門演習のキーワードに「教師の実践と授業」「教師の指導と技術」とありました。教師としての実践力とは何か、先生の行っていた授業のように、どうしたらしっかりと学力を身に付け、子どもたちが飽きず、楽しめるような授業ができるのかをしっかりと専門演習を通して学んでいきたいと思います。そして現場の教師であった小林先生の授業や生活指導・集団作りの様々な経験などを聞き、多くのことを吸収していきたいです。

小学校の教師になりたいと強く思っています。教員採用試験や教育実習に向けて、2年間、小林先生のゼミで頑張っていきたいです。」

- (5) 『2009年度 学生像に関する調査報告書』（2010年3月日本福祉大学学生支援機構学生像検討委員会）の「階層」の分析による。

・報告書の中の「教育的支援」の中で教職員の課題で、「

(教員同士での) ジョイントゼミ」の提起は、示唆にとんでいる。

・私の関わったゼミの学生に「調査の階層」を当てはめて分析を試みたが、果たして妥当性があったのか、今後も検討を加えていきたい。

- (6) 『こんな実践できたらいいな——先輩に学ぶ愛知の教育実践集——』(2010年1月愛知県民間教育研究団体連絡協議会編集委員)

愛知県下の民間の研究サークルで発表されたものでより豊かな実践を集めたもので編集されている。

- (7) 『教育実践講座——教師になるための教育実践講座——』(2007年3月小林信次 私家版)

ここでは、三章の「心に響く言葉・名言」で、教育著作集を基に教育学者、実践家の理論、報告を抜き出して小林が構成しまとめたものである。

- (8) 池谷壽夫「今日求められているリテラシーとは何か」(2006年3月 科研最終報告書『子どもの生活体験と質とコア・リテラシー構造との解明』代表村山士郎 大東大文化大教授 13頁~33頁)「青年の生き方、自立」についての池谷の次のような指摘は、ゼミの活動にもきわめて重要な視点だと考えた。「今日若者にはどのような「リテラシー」が求められるのであろうか。結論から言えば、それは、コミュニケーション・リテラシー、市民のリテラシー、学問的あるいは知的リテラシー、情報消費リテラシー、の4つに集約できる。」

「の「学問的あるいは知的リテラシー」とは社会科学・自然科学・数学に通底するもので、さしあたり「人間、社会および自然界、数量的世界など、世界のあらゆる事象を相互連関と変化の中で理解し、意思決定するために、学問的知識を使用し、課題を明確にし、証拠に基づく結論を導き出す能力」と定義しておこう。いわば人間・社会を含めた世界の諸事象の連関を理解し解釈する知的営みの基礎にある能力と言ってよいだろう。今日、若者の間に(いや大人も含めて)、あらゆる事象を「よい」か「悪い」かといわば二分法的にとらえたり、またきわめて単純化してマニュアル的にとらえ「処理」する思考がいわゆる「試験勉強」のなかで、それをまるでゲームのようにやり過ごしていくために流布している。こうした現状を考える時、あらためてこのリテラシーを丹念につけていくことが求められよう。」

- (9) 藤原帰一「十年間がんばる根気があるか!——問題設定の三条件と『研究力』をつける三つの方法——」『研究する意味』(小森陽一監修 東京出版 2003年5月 130頁 - 132頁)

- (10) 光本滋「国民のための大学づくり」(『日本の民主教育 2009年』(2010年8月 大月書店 286頁)

- (11) 竹内常一「『キャリア』教育とは何か」(『生活指導』2010年6月 明治図書 93頁)

・竹内のキャリア教育へ次のような指摘は、今後の課題としても重要であると思う。「(キャリア教育)に必要なのは、私的、個人的な所有物して『生きる力』を排他的・競争的に追求するのではなく、『生きる力』とはなにかを批判的に追求していく『集団的なちから』である」

・筆者は、新自由主義下における「個人」として「自己責

任論」を乗り越えるためには、個人としても集団としても社会変革の力によって、現状を変えていく姿勢こそ求められていると考える。

- (12) 小島ゆり 山内祐平『未来の学び』をデザインする。(美島ゆり 東京大学出版会 2005年4月 193頁 - 202頁)

学びの場の環境について、コミュニケーションライブラリーのスペースによって情報交換が広がるという指摘もあり、『ゼミ室』の環境をより「学びにふさわしい環境」にしていくことも示唆を受けた。

- (13) 【反貧困】に取り組む子ども集団づくりの課題を明らかにしよう(2010年8月号『生活指導』『全生研 52 大会基調提案』全生研基調小委員会 山本敏郎文責 72頁~87頁)

参考文献

児美川孝一郎『権利としてのキャリア教育』(2007年5月 明石書店)

梅澤正『大学におけるキャリア教育のこれから』(2007年3月 学文社)

教育研究全国集会 2009 実校委員会『日本の民主教育——国民のための大学教育——』(2010年8月大月書店)